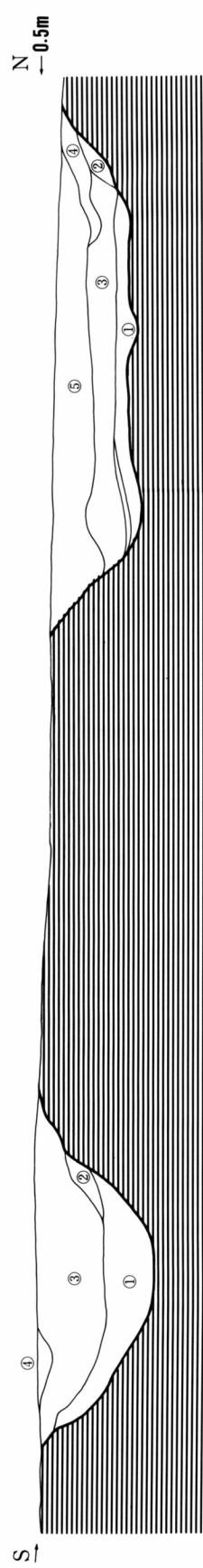


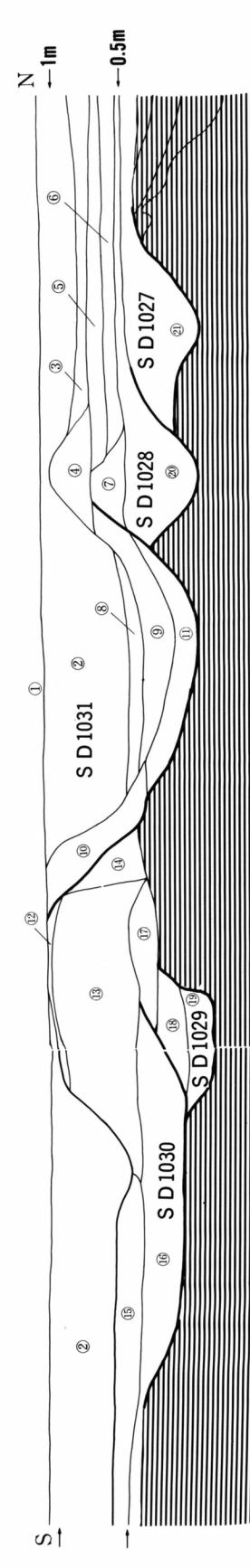
第213図 SD1002 東西土層セクション(1:40)

第214図 SD1001 東西土層セクション (1 : 40)



①暗青灰褐色シルト ③暗灰色砂質シルト

第215回 SD1004 - 1005 南北に星をうつす（1：10）



第216図 SD1027～SD1031 南北土層セクション(1:40 60区西壁)

は逆台形を呈す。本来は一つのもので削平がすんだ結果と考える。

- S D 1051 調査区域南部の北寄り、59G・H区で検出された東西（W—0°—S）溝。上記 S D 1048 の南4.8mのところを並走する。検出長さ42mをはかる。上端幅は50cm～120cmで東部が幅広である。深さ10～30cmで断面は逆台形を呈す。
- S D 1052 調査区域南部の北寄り、57A区の南部にある斜行（W—3.0°—S）溝。上端幅140cm、深さ20cmで断面は逆台形を呈す。検出長は6m。
- S D 1053・
S D 1054 調査区域南部で検出された2条の南北（N—5.0°—W）溝。S D 1053は上端幅100～120cm、深さ20cmで、S D 1054は上端幅100～120cm、深さ10～40cmで断面はともに逆台形を呈す。接し合う両者の前後関係については定かにし得ない。削平が進んでいる関係もあって所々途切れる箇所があるが、検出長は、S D 1053が42m、S D 1054が54.5mである。ともに南北端は調査区外となる。
- S D 1055・
S D 1056
（以下
図版104） 調査区域の南部、59J区北西部で検出された東西溝。S D 1055は検出長5.2m、上端幅50cm、深さ10cmの小規模な東西（W—1.0°—S）溝。S D 1056はS D 1055の南6.8mのところにある検出長5mほどの小規模な東西（W—3.0°—S）溝で、上端幅40cm、深さ20cmをはかる。ともに断面形は逆台形を呈す。
- S D 1057 調査区域の南部、59J区で検出された東西（W—2.0°—S）溝。上端幅240cm、深さ10cmで南側掘形が幾分不定形となる。断面は浅い逆半円弧を呈す。検出長は14m。
- S D 1058 調査区域の南部、59J区で検出された東西（W—2.0°—S）溝。検出長は14mで東端はS D 1053にとりつく。上端幅70cm、深さ30cmで断面は逆台形を呈す。
- S D 1059 調査区域の南部、59J区の南端近くで検出された幾分蛇行する東西（W—7.0°—S）溝。上端幅80cm、深さ10cmで断面逆台形を呈す。検出長は一部途切れるが22mをはかる。

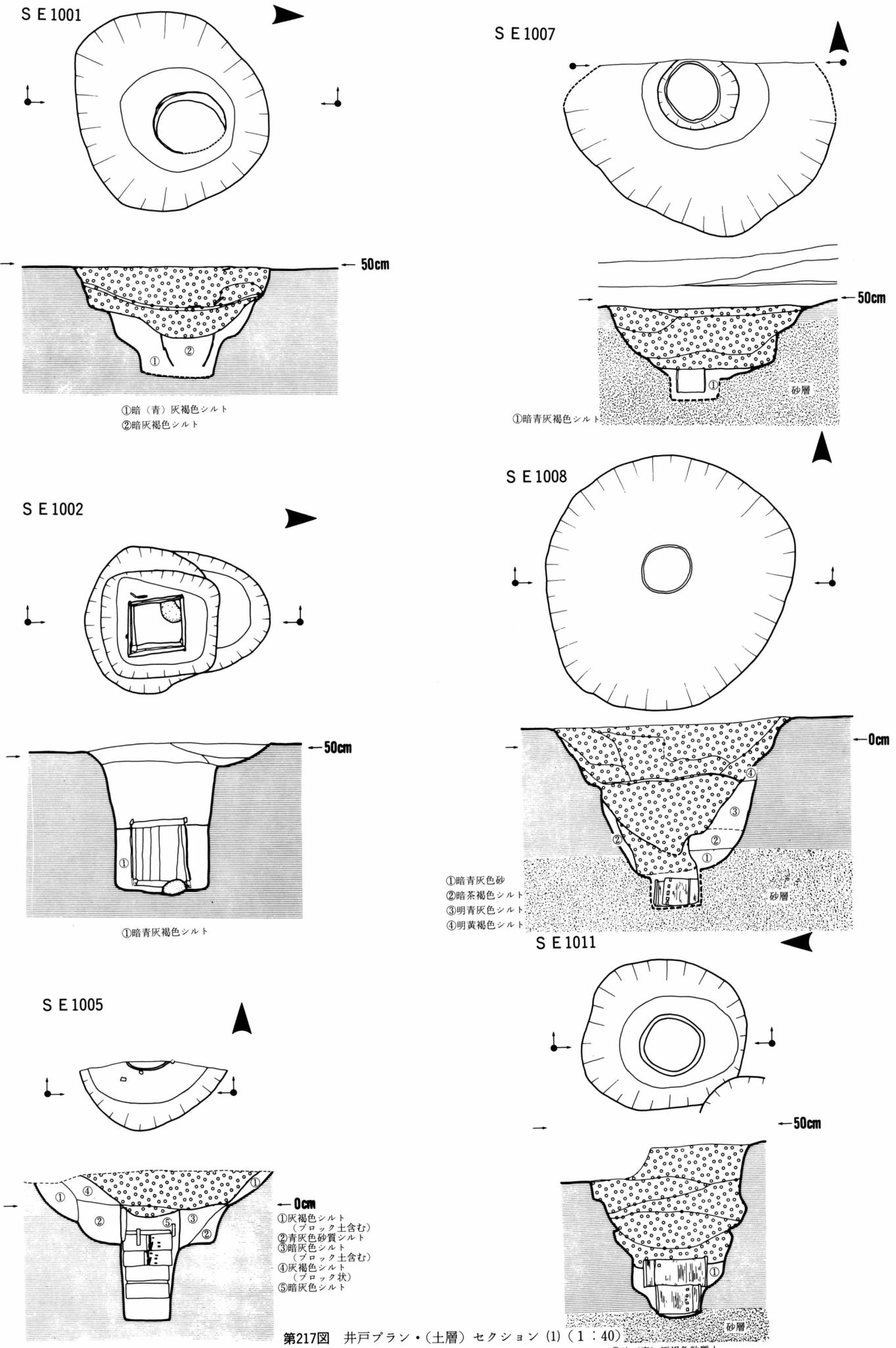
b. 井戸（SE）

今回の調査では18基の井戸を検出した。埋土の状況からみていずれも廃棄の際に内部施設の「抜き取り」が行なわれている。加えて、例えばSE 1001のように掘形が抜き取りに際して拡幅されたと考えられるものもある。したがって、遺存する内部施設でもって単純にこれらの井戸を分類するわけにはいかないが、便宜的に遺存施設でこれらを分類すれば次の如く整理される。

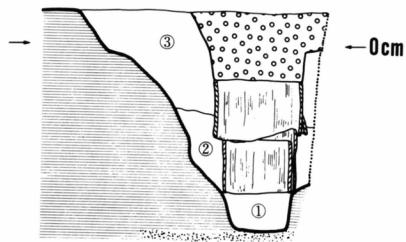
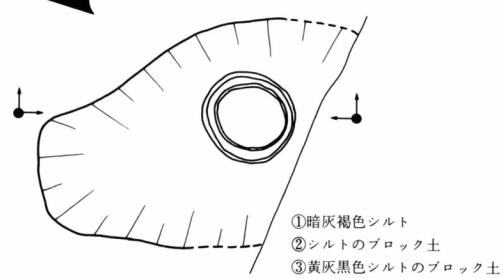
内部施設（遺存）	井戸番号
木枠	SE 1002
曲物	SE 1001 SE 1007 SE 1008 SE 1011 SE 1012
木枠+曲物	SE 1005 SE 1014 SE 1017
カメ+曲物	SE 1016
なし	SE 1003 SE 1004 SE 1006 SE 1009 SE 1010 SE 1013 SE 1015

以下、各井戸の所見について記す。

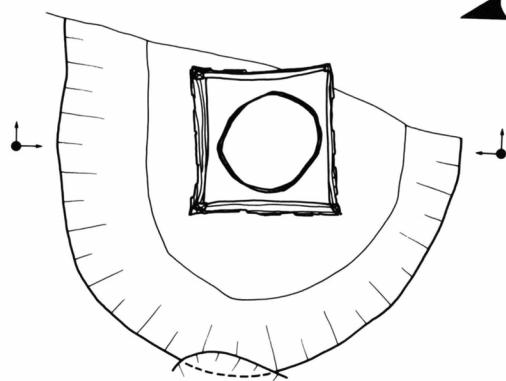
- S E 1001** 調査区域北部、60A区の西部にある井戸。S B1001の北西2mの位置にあたる。掘形は
(以下)
図版98 径160cmの円形で、深さは90cm。ただし掘形上半については廃棄の際の抜き取りに際して拡幅されているものと推察される。掘形のほぼ中央に曲物が2段(ともに径0.4m)遺存していた。曲物上端レベルあたりの地山に厚さ0.3mほどの砂層が存するが、底面が砂層というわけではない。遺物は抜き取り跡埋土よりの出土である。
- S E 1002** 調査区域北部、上記S E 1001の南西14mにある井戸。S B1004北東隅柱穴の内側の位置にあたる。掘形は、上端部が長径140cmの楕円形を呈するが、これは抜き取りの際の拡幅によるもので、本来は方形(南北95cm、東西80cm)と考えられる。深さは140cm。掘形の中央に木枠(一辺44cm、高54cm)が遺存していた。木枠は縦板組のもので、底面に角材を目違いの柄で組んだ方形の木組(以下、横桟)を設け、その外側に縦長の板材(長さ54cm、幅14cm、厚2cm前後)をたてならべ側板とし、側板の外側には下端を斜めに切り落した竹材(1部は半截)で囲繞し、側板の内傾・倒壊を上部のもう1つの横桟で支え、さらに四隅に角材の束木を配して上部の横桟の落下を支える、という構造となっている。遺物は抜き取り跡埋土から出土したが、そのうちの1点(灰釉系陶器碗品)は完形品である。
- S E 1003** 調査区北部(60B区)、S B1006の北にある井戸。掘形は径180cmの略円形で、深さは100cmをはかる。木枠等の内部施設は認められないが、底面が地山の砂層へ達していることから井戸跡とした。「素掘り」の井戸の可能性も否定できないが、発掘時の所見よりすれば砂層からの湧水がはげしくて壁の崩壊が生じやすく何らかの施設を必要としたであろうことは充分考えられるところである。こうしたことから廃棄時に徹底的な抜き取りが行なわれたと解しておきたい。遺物はいずれも破片であるが、埋土の中位より比較的まとまって出土した。
- S E 1004** 調査区域北部、上記S E 1003の南東15mにある井戸。掘形は径350cmの円形で、深さ140cmをはかる。木枠等の内部施設は認められなかったが、底面が地山の砂層へ達していることから井戸とした。おそらくは廃棄時に徹底的な抜き取りが行なわれたものと解しておきたい。ちなみに底面近くで曲物の「まわしの側板」とおぼしき残片の出土をみており、内部施設として曲物が用いられた公算がある。遺物は埋土の上・中位から比較的まとめて出土したほか、上層の北西部で10数個人頭大～拳大の円礫の出土をみた。
- S E 1005** 調査区域北部の南寄り、59N区の北壁沿いにある井戸。掘形は、その一部が調査区域外にあたるため正確を期せないが、径190cmほどの円形で、深さ120cmをはかる。掘形は一旦摺鉢状に深さ60cmほど掘ったのち、その中央を曲物の径分だけさらに深さ60cmほど垂直に掘り抜いている。掘形の中央に曲物が2段(上:高30cm、径40cm、下:高28cm、径40cm、上・下とも「まわし側板」が2段づつ存すことから一見すると4段にみえる)据えおかれている。その上部に角材の残欠が3本存することみて木枠が用いられていたものとみられる。なお最下段の曲物下約20cmほどはシルトで、曲物は直接底面に接していない。遺物は



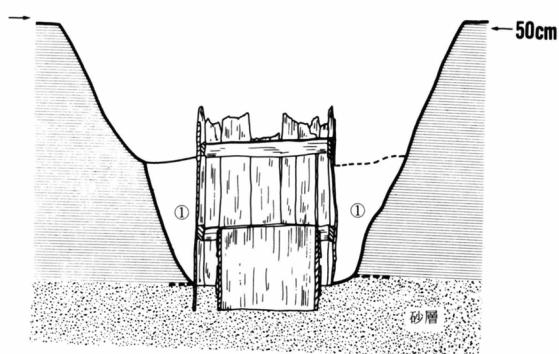
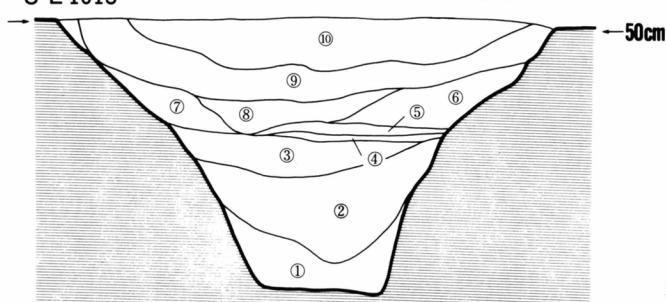
S E 1012



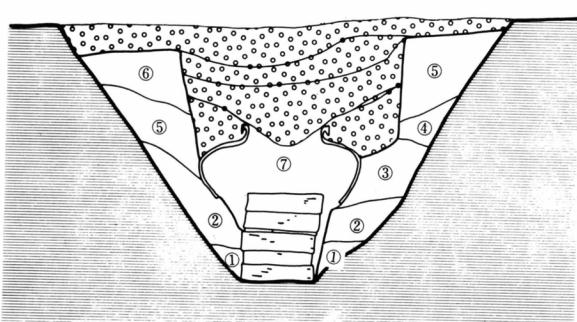
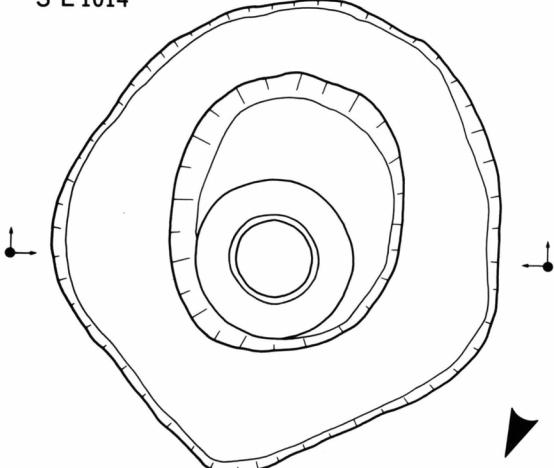
S E 1016



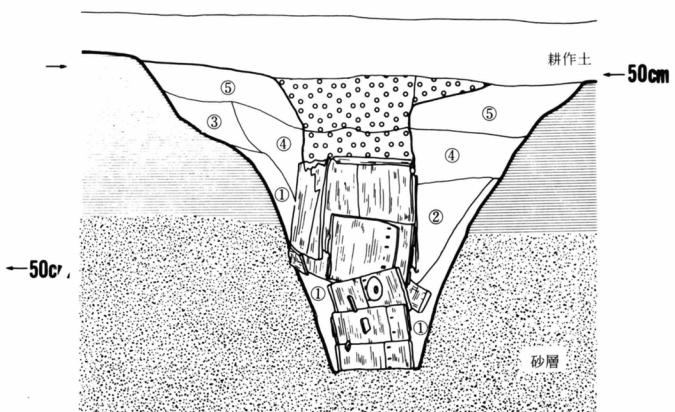
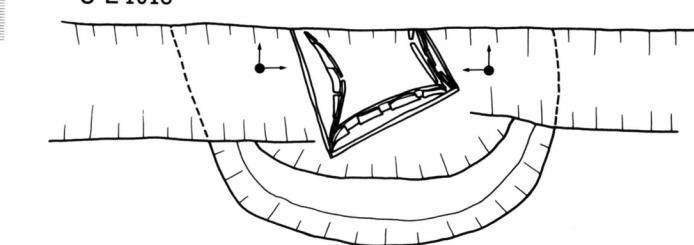
S E 1013



S E 1014



S E 1018



第218図 井戸プラン・(土層) セクション (2) (1 : 40)

いずれも破片で、抜き取り跡埋土からの出土である。

- S E 1006
(以下
図版99)** 調査区域北部の南寄り、59D区北部のS D1018の南2.0mにある井戸。掘形は径250cmの円形で、深さ130cm。掘形の中位に幅狭な段を有している。木枠等の施設は認められないが、その形状および底面が砂層に達していることから井戸とした。底面より竹編の籠（？）が出土した。
- S E 1007** 調査区域北部の南寄り、60C区の北壁沿いS D1013の東にある井戸。掘形は径210cmの円形で、深さは70cm。埋土の状況から見て掘形の上半は廃棄時に拡大されている公算が高い。掘形のほぼ中央に曲物（径40cm、高18cm）が1段遺存していた。遺物は、灰釉系陶器碗のごく細片が少量出土したにすぎない。
- S E 1008** 調査区域中央部のやや北寄り、61調査区域のほぼ中央にある井戸。掘形は径200cmの円形で、深さ150cm。掘形の中央に曲物（径35cm、高24cm）が1段遺存する。掘形は抜き取り時に拡幅されている公算が大である。遺物は少量が抜き取り跡埋土より出土したにとどまる。
- S E 1009
(以下
図版100)** 上記S E 1008の南4.0m、大型土坑S K1004の東西部の北側掘形に位置する井戸。切り合いで関係からみてS K1004よりは新しい。掘形は径200cmの円形で、深さは140cm。内部施設は認められないが、底面が砂層に達していることから井戸とした。埋土中より出土した遺物のうち灰釉系陶器碗（2034）は完形品である。
- S E 1010** 上記S E 1009の南4.0m、S K1004とS D1021の間にある井戸。掘形は径110cmの円形で、深さ100cm。底面が砂層に達することから井戸としたが、内部施設は認められない。
- S E 1011** 調査区域中央やや北寄り、61調査区域の南東部にある井戸。上記S E 1010の南90mで、S D1022によって掘形の一部が壊されている。掘形は径130mの円形で、深さ140cm。掘形は抜き取り時に拡幅されている公算が大である。掘形の中央に曲物が2段遺存することが、下段の曲物は径34cm、上段が径50cmと径に大小がある。下段のものは「水溜」としての目的で据えられたのかも知れない。遺物は細片が抜き取り跡埋土から出土したにとどまる。
- S E 1012** 調査区域の中央北寄り、61調査区域の東南隅近くにある井戸。上記S D1011の南0.8mでS E 1013、S E 1014が近接する。掘形は、その一部が壁中に入り正確を期せないが、径1.3m前後の楕円形で、深さ120cm、掘形の中央に曲物が2段遺存する。S E 1011同様に下段が径35cm、上段が径50cmと径が異なる。下段の曲物下20cmほど暗灰褐色シルトの堆積を見たのち砂層へ達する。曲物の上方にはほぼ同径の抜き取り跡がみられ、これの点からみて上方にはさらに数段の曲物が存した可能性がある。遺物はいずれも細片で、抜き取り跡埋土よりの出土である。
- S E 1013** 上記S E 1012の南隣り60D区の東北隅にある井戸。S E 1014の一部をこわしている。掘形は径260cmの円形で、深さ150cmをはかる。埋土の堆積状況に「井筒」部を認めるとはできないが、底面が砂層に達していることから井戸とした。「素掘り」井戸の可能性も否定できないが、発掘時における湧水のはげしさからみて何らかの施設を有したものと推察される。とすれば廃棄時の抜き取りは徹底したものであり、掘形の形状は改変されている可能性が大である。遺物は埋土①～③を「下層」、埋土④～⑩を「上層」として取り上げた。

- S E 1014** 調査区域の中央北寄り、上記 S E 1013の東隣にある井戸。掘形の一部がS E 1013により壊されている。掘形の一部が調査区域外となるが長径（推定）3.2m、短径220cmの橢円形で、深さ160cm。掘形の中央に木枠を一段設け、その底内面に曲物（径50cm、高45cm）を据えている。木枠は縦板組で、下端より40cm、86cmの二段に角材を目違いの枘で方形に組んだ横桟を配し、四隅に角材を束木（長さ40cm）として配し上段を支える木組の外側に縦長の板材（長さ100cm、幅10~18cm、厚さ2cm前後）を側板としてたてならべたものである。上段の横桟の四隅に束木の残欠とおぼしき角材が遺存することからみて、木枠はさらに上方へ続いていた公算が大である。曲物は下段の横桟にその上端レベルが一致するように置かれている。曲物と側板間にシルトが充填されていたこと及び木枠側板の下端が不揃いであることからして、下段の横桟が木枠底面として意職されていた可能性がある。遺物は木枠内から曲物内にかけて、完形品および一部欠損品の灰釉系陶器椀・皿が4組出土した。
- S E 1015** 調査区域の中央、59F区の北部、S D1028の北2.0mにある井戸。掘形は、その一部が調査区域外（壁中）となるが、およそ径260cmの円形で、深さ130cm。内部施設は認められないが、その形状から井戸とした。
- S E 1016**
(図版102) 調査区域中央やや南寄り、59E区の北東部にある井戸。東隣にS D1039の南端部がある。掘形は径240cmの円形で、深さ135cm。摺鉢状の掘形の中央に曲物を2段（ともに径40cm、高さは下段が26cm上段が22cm）据えおき、その上に底部を欠いた常滑窯産の甕をのせている。この上にさらに甕が積まれるのか否かは抜き取りのため定かではない。遺物は抜き取り跡埋土中より出土した。
- S E 1017**
(図版102) 調査区域中央やや南寄り、59F区の中央にある井戸。後世の削平等により掘形は判然としないが、径280cmほどで深さ80cmと推定される。木枠の最下端に設けられた横桟(1辺84cm)と考えられる角材を組んだ方形組が遺存し、その内側やや東寄りに曲物が2つ「入子」状に据えられている。外側の曲物は径50cm、高40cmで、内側のものは径32cm、高19cmをはかる。
- S E 1018**
(図版104) 調査区域南部、57A区の東端近くにある井戸。一部が調査区域外となるが掘形は径230cmの円形で、深さ160cm。掘形の中央に曲物を4段積み上げられ、さらに最上段を囲む位置に木枠が1段据えられている。曲物は下の3段はほぼ同大（径40cm、高22cm）で、最上段がひとまわり大型（径44cm、高32cm）である。木枠は1辺70cmの方形板組で、上・下端部に横桟が設けられている。下段の横桟には幾分大型の角（板）材を目違いの枘で組んだものが用いられている。その外側に幅70cm・高さ50cmの板材をたて、さらにその外側には幅10cmほどの板材を各辺4枚づつはりあわせている。抜き取り跡の形状からみて、ほぼ同大の木枠がさらに積み重ねされていた可能性が考えられる。遺物は曲物内から出土したが、灰釉陶器椀（2066）は完形品である。このほか曲物内からは打割られた河原石が数個出土した。

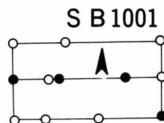
c. 掘立柱建物 (S B)

調査区域で検出された建物跡は全て掘立柱建物で、総計で13棟を数える。そのほかに建物の柱穴と断定するにいたらないものもその周辺で多々みられる。検出状況についてみると、掘立柱建物は概ね調査区北部の60A・B区と調査区域中央北寄りの61調査に集中し、それ以外では、60C区で1棟および59E区北部⁽⁸⁾で柱穴の可能性をもつ小土坑が集中して検出されたにとどまる。掘立柱建物の特徴としては、60A・B区および60C区検出のものはほとんどの柱穴で木製基礎板が認められたのに対し、60D区以南のものはそれが認められたいという点を指摘し得る。この相違の要因については定かではないが、木製基礎板を有するものの地山がシルトで、有しないものの地山が砂質シルトであることからみて、地山土の相違が反映されているものと解すことも一考に値しようか。

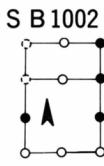
以下、掘立柱建物について、60A・B区、60C区、61・60D区、地区毎に記述することとする。なお参考として揚げた柱配置図の記号は○印が掘立柱掘形（柱穴）で、そのうちで木製基礎板を認めたものを●印で示した。○印は推定である。

〈60A・B区〉(図版105)

調査区の北部、東・南・西側をそれぞれ S D1002・S D1012・S D1003・S D1004・S D1006で囲まれた東西約30m、南北55mの長方形区画の内に総計で8棟の掘立柱建物が検出された。



調査区北部、60A区で検出された東西（N-0.7°-W）棟の掘立柱建物。柱通り・柱間が不揃いであり、なお検討する点もあるが柱筋を重視し、桁行総長803cm(間数は定め難い)、梁行2間(400cm 200cm等間)の建物と考えておきたい。柱掘形は不整形で、径20~40cm、深さ10~20cmと大きさに大小がある。4つの柱掘形内に木製の基礎板が遺存する。殊に棟柱通りの東第2・3柱掘形の基礎板は大形で内底面とほぼ同大である。



上記S B 1001の西側で検出された桁行4間(590cm 145cm等間)、梁行2間(396cm 198cm等間)の南北棟掘立柱建物。ただし西側柱列第3、4柱の掘形は未検出。棟方位は(N-0.2°-W)である。北1間分が仕切られ、また建物内南部、棟柱通り上の位置に南北に長い方形土坑(150×80cm 深さ20cm)がある。位置的にみて建物に関連する施設の可能性がある。柱掘形は不整形で径20~60cm前後、深さ30cm前後である。4つの柱掘形に木製の基礎板が遺存し、東側柱列南第2・3柱の掘形の基礎板は南北に細長く、北妻柱列東第1柱の掘形のものは東西に細長い。北妻柱列東第1・2柱の掘形はS B 1003により壊わされている。なお、北妻柱列は前記のS B 1001の北側柱列の西延長上にあたり、西・東側柱北第2・3はS B 1001の棟柱通り・南側柱列の西延長に位置しており、このS B 1002とS B 1001は計画的な配置がなされている公算が大である。

S B 1003

上記S B 1002に重複する位置にある推定南北棟掘立柱建物。桁行2間分(550cm 275cm等間)を検出し梁行は間数不明(350cm以上)で、棟方位はN-7.2°-Wである。東側柱列

S B 1003 第1・3の柱掘形は不整形で径30cm、深さ30cm前後、第2は一辺30cmの方形の掘形の内底面に径30cmの長円形の掘形を有している。この第2柱掘形と第1との間にも方形の土坑がある。上記S B1002の柱掘形をこわしているが、その形状は類似しており、このS B1003に関連するものかも知れない。また東側柱列第1・2間の西側、建物内南部に南北に長い方形土坑(100×60cm、深さ30cm)が存しその位置関係からしてS B1002にみられた方形土坑と同じ性格のものと判断される。なお東側柱列第1・2の柱掘形に木製の礎板が遺存する。

S B 1004 S B1002の南西で検出された桁行4間(748cm、187cm等間)、梁行1間(374cm)の南北棟掘立柱建物。東側柱列南第3および西側柱列南第3・4・5柱掘形は未検出である。棟方位はN-0.3°-Eで、S B1002とは若干方位を異にするがS B1002の西側柱列の南延上がこのS B1004の東側柱列にあたり、両者は記画的に配置された可能性がある。柱掘形は不整形で径50cm、深さ20cm前後である。柱掘形のすべてで木製の礎板が検出された。北妻柱列第1柱掘形のすぐ西側でS E1002が検出され、井戸枠の位置は建物内であることからこのS B1004に関連する可能性もある。なお西側柱列の西1.5mを南北にS D1006が並走する。

S B 1005 S B1002の南、S B1004の東側で検出された桁行2間(488cm 244cm等間)、梁行1間(212cm)の東西棟掘立柱建物。棟方位はE-0.5°-Nである。柱掘形は不整形で径20~40cm、深さ20~30cmをはかる。総じて四隅の柱掘形が大形である。木製の礎板は認められない。

S B 1006 S B1004の南東、S B1005の南側で検出された桁行3間(659cm 219cm等間)、梁行1間(342cm)の東西棟掘立柱建物。棟方位はE-2.4°-Nである。柱掘形は不整形で、径30~70cm、深さ20~40cmと規模に大小がある。北側柱列東第2の柱掘形を除くほかすべてで木製の礎盤が検出された。そのうち南側柱列第1では2段に重ねられていた。なおこのS B1006の西半の柱掘形周辺では柱通りにのらないが木製礎板を有する小土坑が4基ほど存すが、S B1006との関連は定かでないが、これらは建物の柱掘形の可能性が大である。

S B 1007 上記S B1006の東側で検出された桁行1間(304cm)、梁行1間(192cm)の南北棟掘立柱建物。棟方位はN-1.1°-Wで、S B1006南北方位と若干異なるが、S B1006の北側列の東延長上がこのS B1007の北妻柱列と概ね一致し、両者の配置に計画性が看取される。柱掘形は不整形で径40cm、深さ20cm前後。北東隅を除いた4つの柱掘形で木製の礎板が認められる。

S B 1008 S B1006の南で検出された桁行2間(390cm、195cm等間)、梁行1間(395cm)の南北棟掘立柱建物。棟の位置が南北に走る近代の溝で壊されている。柱掘形は不整形で、径20~50cm、深さ10~30cmと規模に大小がある。北西隅の柱掘形は殊に小規模である。木製の礎板はこの北側の柱掘形を除く4つで検出された。なかでも東側柱列第1・2のものは接合し径20cm、長さ25cmの丸太を縦長に割り、破面を上方にむけて礎板としたものであったことが知られた。

<60C区>

大型土坑（S K1001、S K1003）の西側中央で掘立柱建物が1棟検出された。

S B1009



調査区北部中央寄りの60C区で検出された桁行1間（200cm）、梁行1間（170cm）の南北棟掘立柱建物。柱掘形は不整形で30～50cm、深さ20cm前後である。北東隅を除く柱掘形で木製の礎板が検出された。なおこのS B1009との関連は定かではないが南妻柱列の東延長2.2m、幾分北にズレた位置で2.0m間隔の柱掘形様の小土坑（径40cm、深さ10cm）が存す。

<61・60D区>（図版106）

調査区域の中央北寄り、61調査区の南端部から60D区北東部にかけて柱穴様の小土坑が集中して検出された。より仔細にみるとこれらは、北・西側をS D1022に、南側をS D1025で区切られた区画と、北・西側をS D1025に区切られた2つに分けられる。北側の区画内の小土坑を掘立柱建物の柱掘形とした場合、一直線に並ぶものが多く様々な組み合せを考えられ調査担当者間でもなかなか見解の一致をみなかったものである。なお検討を要する点も多いが、ここでは一解釈としてS B1010、1011、1012の3棟を想定してみた。

一方、南側の区画でもほぼ同様な小土坑が数多く検出されているが、北側に比べ直線的に並ぶものが少ない。掘立柱建物はS B1013の1棟のみであるが、東壁近くのPit 86、85、87は掘立柱建物の北西隅で構成する可能性があり、あるいはPit 82・86で西妻部を構成する可能性もあるなど今後の発掘調査に期するものもある。

S B1010



60D区の北端、S D1022の東3.0mのところで検出された桁行2間（430cm 略215cm等間）、梁行1間（210cm）の南北（N—5.5°—W）棟の掘立柱建物。柱掘形は径30cm前後、深さ20cm前後で、一部はS D1024の埋土を穿って設けられている。東・西側柱列の南延長上（3.5mと幾分長い）にある後記S B1011の南側柱列東第2・3柱掘形はこのS B1010のものとすべきであるとする見方もあり、同じく東側柱列第1・2の東延長上にある（若干のズレを有するが）Pit 9・Pit 97についてこのS B1010のものと解する異論もあることを付記しておきたい。

S B1011



上記S B1010と一部重複する位置にある桁行3間（450cm、東から125cm、215cm、110cm）、梁行2間（470cm、南から280cm、190cm）の東西（W—4.5°—S）棟掘立柱建物。北側柱列・東第3の柱掘形が確認し得なかった。Pit 14・17の位置が幾分ズレるが、北1間分が仕切られていた可能性がある。柱掘形は径30cm前後、深さ10cm～20cmである。

S B1012



上記S B1011の東側で一部重複して検出された桁行2間（390cm、東から265cm、125cm、梁行1間（270cm）の東西（W—3.0°—S）棟掘立柱建物。柱掘形は径30cm前後、深さ10～20cmである。S B1011東妻柱列の南第1・2柱掘形とこのS B1012の西妻柱列南第1・2はほぼ重複し、S B1011に壊されている。また両者の南側柱列はほぼ同一直線上にある。

S B1013



S D1025の南北部の終息地点の南東部で検出された桁行2間（240cm、南から170cm、70cm）、梁行1間（110cm）の南北（N—7.5°—W）棟掘立柱建物。柱掘形は径20cm前後、深さ10cmほどで、東側柱列第3の柱掘形は確認されなかった。

d. 土坑（SK）

土坑として一括した遺構のうちには、その形態・規模等からある程度の類別が可能である。すなわち、一辺が6.5mを超える「大形土坑」、柱掘形（柱穴）類と考えられる小形の土坑、そしてそれ以外の中規模の土坑である。ここでは遺構番号としてはいずれも「SK」を付すものの便宜的に前者を「大形土坑」とし、後二者を「土坑」と呼んで区別することとする。

〈大型土坑〉（図版99・100）

大型土坑は60C区および61調査区にみられ、総計で4基（SK1001～1004）を数える。平面形は長方形が3基で、L字形が1基である。断面はいずれも逆台形を呈す。その性格については詳にし得ないが、池（SG）の可能性を指摘する見解もある。

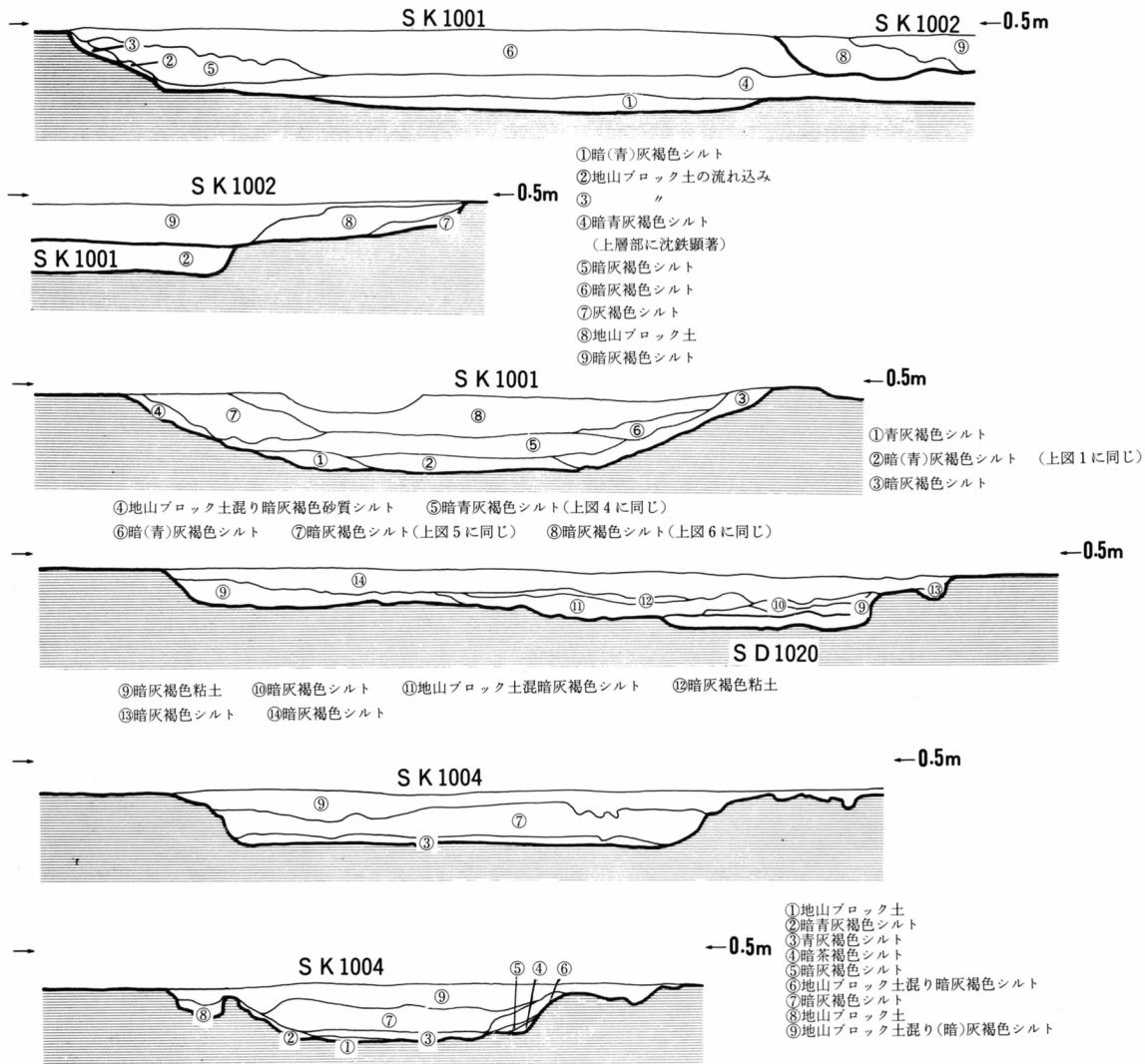
- SK1001 調査区域北部、60C区の中央で検出された東西13m、南北7mの長方形プランの土坑。深さは90cmをはかり、断面は逆台形を呈す。埋土はシルトを基調とし、外周から中央に流れ込む形の層状堆積を示す。南辺に接して幅60cm、高さ20cm前後の土壠状の高まりが東南角から8mにわたってみられる。西側の3分の1ほどがSK1002によって壊される。
- SK1002 上記1001の西部に一部重複して検出された東西700cm、南北580cmの長方形プランの土坑。深さは50cmをはかり、断面は逆台形を呈す。埋土は、外周から流れ込む形で地山ないしSK1001の埋土のブロック土が堆積し、中央部には暗灰褐色シルトが堆積する。
- SK1003 SK1001の南3.5mのところで検出された東西14m、南北8.5mの長方形プランの土坑。長軸方位は、SK1001・SK1002と同じで、両者は平行する位置関係にある。深さは50cm前後をはかり、断面は逆台形を呈す。埋土はシルトを基調とし、層状堆積を示す。SD1020を壊している。
- SK1004 調査区の北部南寄り、61調査区で検出された平面L字形の土坑。東西部はSD1021、南



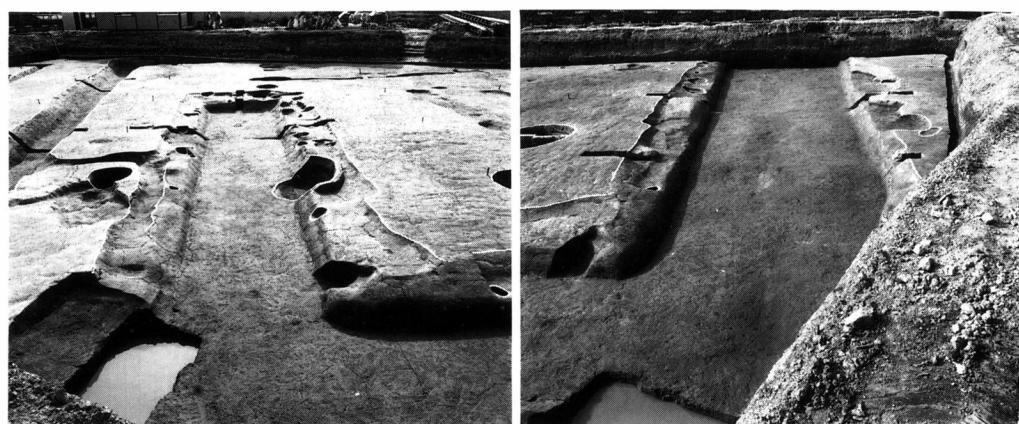
第219図 大型土坑 SK1001（西から）



大型土坑 SK1003（西から）



第220図 大型土坑 土層セクション (1 : 80)



第221図 大型土坑 東西部 (東から)

大形土坑 南北部 (南から)

北部は S D1015 と方位を同じくする。東西部は長さ 22m、幅 7 m、深さ 60cm を測り、南北部は検出長（北端は調査区外となり未検出東西部北側の交点まで）15m、幅 8 m、深さ 60cm をはかる。外周部分には 80cm 幅のテラスがめぐるが、このテラスの上面は凹凸がはげしい。埋土は、シルトを基調とするが、上層ではブロック土の混入が目立つ。これより最終的には人為的な埋め立てが行なわれた可能性を示唆する。なお、当初、L 字形のプランについて、方形土坑が 2 基切り合い関係にあるのではないかとの予測にたち検討を加えたが、切り合い関係を示す材料はなく、当初より L 字形プランに掘削されたものと考えられる。なお南辺に S D1021 につなぐ溝状の凹みがみられるが、これは検出状況からみて、この S K1004 が中ほどまで堆積した時点で掘削されたものとみられる。

〈土坑〉

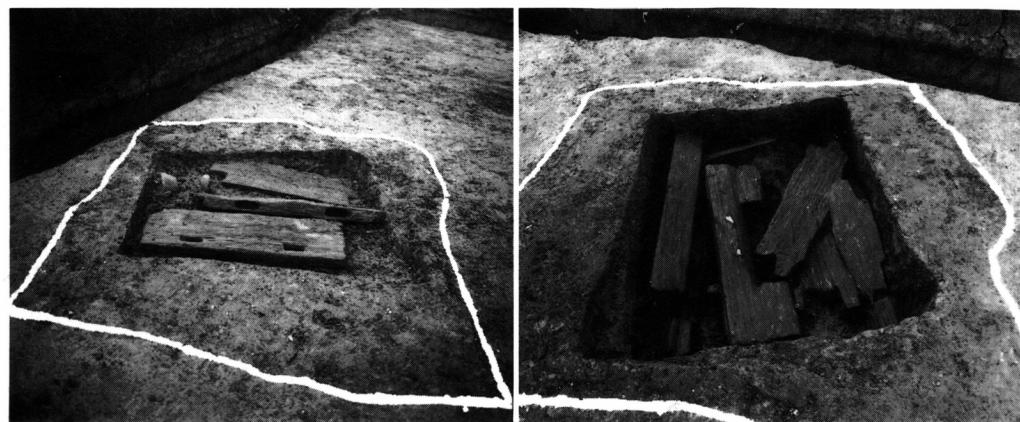
柱掘形とみなしえるものについては、既に（c）掘立柱建物の項でふれたので遺物出した一部を取り上げるにとどめることとする。そのほかの土坑については、遺物の出土をみたおもなものについて記述することとする。

- S K 1005 (図版98) 調査区域北部、60B 区で検出された長さ 600cm、幅 70cm、深さ 20cm の南北に長い溝状の土坑。炭化物があたかも充填されたかのように埋土として堆積している。既述のようにこの埋土は S X1001 と酷似しかつ出土遺物が接合することから、両者はその形成過程について強い関連をもつものと推測される。
- S K 1006 (以下 図版99) 調査区域の北部南寄り、60C 区の S D1014 の南掘形で検出された径 100cm、深さ 20cm ほどの土坑。S D1014 との切り合い関係については不明。埋土は灰褐色砂質シルト。
- S K 1007 調査区域の北部南寄り、60C 区の S D1004 と S D1015 の間で検出された一辺 60cm 深さ 15 cm ほどの方形で柱掘形状の土坑。
- S K 1008 同じ 60C 区の南西部、S K1003 の西側で検出された径 110cm、深さ 20cm ほどの土坑。埋土は灰褐色シルト。
- S K 1009 上記の S K1008 の南 3.5m のところで検出された南北に長い長方形プランの土坑。長さ 500cm、幅 190cm、深さ 40cm をはかり埋土は地山ブロック土を基調とする。S D1020 を壊して掘削されている。
- S K 1010 調査区域の中央北寄り、61 調査区にある S D1004 の南北部東側テラス上にある長さ 300 cm、幅 100cm ほどの半円形状の土坑。深さ 20cm ほどで土坑というよりは S K1004 のテラス上の凹みとすべきかも知れない。
- S K 1011 調査区域の中央北寄り、60D 区で検出された一辺 30cm、深さ 30cm ほどの略方形プランの土坑。S B1011 内の北東隅近くに位置し、既述のように掘立柱建物の集中する地点であることからみて柱掘形の可能性がある。
- S K 1012 調査区域の中央北寄り、61 調査区にある径 20cm、深さ 10cm ほどの土坑。S B1011 南に位置し、南北側柱列の第 2 掘形を結んだライン上にあることからみて、この S B1011 に関連する柱掘形の可能性もある。

e. 墓 (S Z) (図版99)

墓と考えられるものは1基みられる。ただし下記のように若干の問題点もある。

S Z 1001 調査区域北部の58D区、S D1019とS D1020のほぼ中央で検出された。その構造について調査の経過を追って説明する。まず遺構の検出を行ったところ一辺が140~160cmの方形の土坑が認められ、その埋土の中央にさらに一辺80cmの方形の土坑の存在が確認された。埋土は内側のものが炭混りの暗灰褐色砂質シルトで、その外側は地山ブロック土からなっていた。そこでまず内側の土坑から発掘をはじめたところ、柄を有するものをふくむ各種の板材（長さ70~80cm・厚さ60cm）前後が東西方向に長く乱雑に積み重ねられた状況で出土し、それに混じって炭・火葬人骨（？）および蔵骨器と考えれる壺2個体（2166・2167）が破片で出土した。これらを取り上げたところ土坑の底面に2本の角材が東西方向に並列して存し、その両端がさらに外側へと続いていることが確認された。そこで外側の土坑の埋土（地山ブロック土）を掘り上げたところ、この角材は12×12×112cmのもので、外側の土坑の底面に長軸に直交するかたちで据え置かれていることが判明した。推測の域をでない点もあるが、こうした状況からみて、このS Z 1001の構造は一辺140~160cm、深さ40cmの方形の土坑を掘り、その底に2本の角材を据え、その上に木櫃を置いて蔵骨器を納めたのち、掘削土で埋めたもので、後世の開墾等の造成に際して発見され一度取り上げられた後に再度埋め戻された結果、上記のような出土状況となったのではないかと推定された。ただ板材による木櫃の復元は成功していない点およびほかに木櫃内に蔵骨器を（しかも2個体）納めた事例を欠く点で若干の問題を残した。もっともこのS Z 1001の東方のS D1015の東西部で五輪塔の残欠が、S D1016で四耳壺（2582）が骨粉を伴って出土しており、S Z 1001の周辺に墓域の存在が予想されるところである。



検出状況（南から）

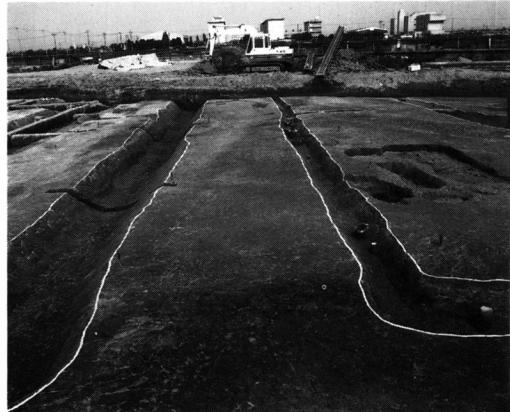
板材の出土状況（東から）

第222図 S Z 1001

f. 道 (S F)

既述のように今回の調査で検出された多数の溝のうちには、しばしば2条の溝が平行する位置関係にある箇所が認められる。このような2条の溝間の高まりは、その形状からみて「道」の可能性がある。ほかにこれを積極的に支持する材料は見い出せないが、ここではひとまず道として扱っておきたい。

- S F 1001 調査区域北部、60A・B区で検出されたS D1001とS D1002・1012・1003の間。幅250cm、検出総長26.0mをはかる。
- S F 1002 調査区域の北部、60B区南部で検出されたS D1004とS D1005の間。幅280~390cm、検出総長30.0mをはかる。
- S F 1003 調査区域北部の南寄り、60C区で検出されたS D1015とS D1016の間、幅320~400m、検出総長27.0mをはかる。
- S F 1004 調査区域の中央北寄り、58E・59K・61調査区にかけて検出されたS D1021とS D1023の間、幅400~480cm、検出総長28mで、S F 1005、S F 1006と交差する。
- S F 1005 調査区域の中央北寄り、61調査区で検出されたS D1021、とS D1022の間。幅400cm前後、検出総長28mをはかる。
- S F 1006 調査区域の中央北寄り、61調査区から60D区にかけて検出されたS D1023とS D1022・1025の南北部の間。上記S F 1004の南延長上にあたるが、便宜的にS F 1005との交差点以南をS F 1006として把握することとした。幅400cm前後で、検出長は28mをはかるが、S D1025が終息した地点から以南ではS D1023に沿ったこの道幅分では小土坑など他の遺構が認められない。のことからS D1025の終息地点から14m南下したのち東折しさらに8.0mほどが道であった公算が高い。
- S F 1007 調査区の中央寄り、59E、F区で検出されたS D1035・1033とS D1036の間。幅が280~480cmで、巾の広狭が大きくこの点で若干の問題がある。検出総長32mをはかる。なおS D1042をS D1036の延長と考えた場合には、検出総長54mとなる。
- その他 上記のほかに可能性のある箇所として、まず調査区域中央のS D1027-1031の重複部があげられる。切り合い関係等をみると2条が同時存在していた公算があり、この意味で道が存したことが予想される。また調査区域の南部、59G、H区で検出されたS D1048~1051が並走する箇所も注意すべき箇所である。ただ、S D1048・1047・1049とS D1050の組み合せを考えた場合には幅600cmをはかることとなり、あまりにも幅広のきらいが生じるなど若干の問題がある。



第223図 S F 1005 (西より)

g. その他

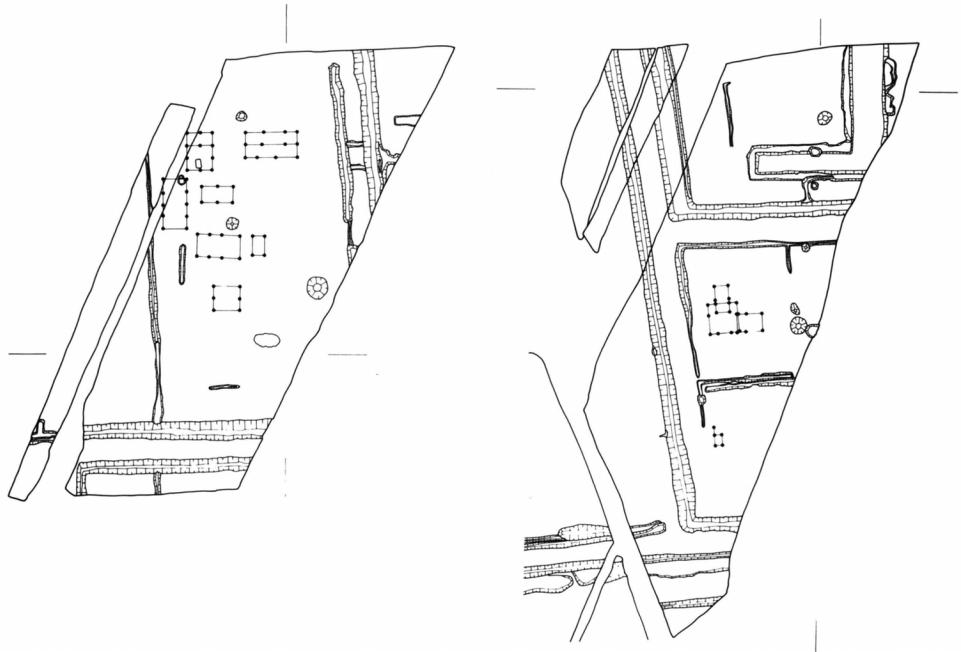
- S X1001
(図版98)** 調査区域北部、60B区で検出された炭化物の集積。東西400cm、南北200cmの範囲に炭化物の集積（最大厚10cm）をみるもので、炭化物層中より陶磁器類、鉄器片が多数出土。炭化物層下の地山に被熱の痕跡を見い出せないことから、これらの炭化物は他所から移動されたものとみられる。また炭化物層中から出土した陶器の多くが、このS X1001の北西15m地点にある炭化物を埋土の基調とするSK1005出土のものと接合したことからみて、両者炭化物の形成は期を一にした公算が高い。
- S X1002
(図版100)** 調査区域の中央北寄り、60D区で検出された溝状の遺構。検出長9.0m、幅2.5m、深さ10cm、きわめて浅い点が特徴的である。埋土は灰褐色シルトを基調とするものでSD1024、SB1011により壊されている。その形状、埋土は下記よS X1003と酷似している。
- S X1003
(図版100)** 上記S X1002の東7mのところで検出された溝状の遺構、検出長5.5m、幅2.5m、深さ20cmで、きわめて浅い。長軸はほぼS X1002と一致する。埋土は灰褐色シルトを基調とする。

h. 屋敷地について

今回の調査では、溝で画された広場の内に井戸・堀立柱建物あるいは柱穴状の土坑が集中することから「屋敷地」と考えられる地区が4箇所見出された。

**屋敷地1
(図版105)** 調査区域の北部で検出されたもので、東・南・西側が溝により画された東西約30m、南北約55m(推定)の方格の屋敷地である。建物の配置についてみると、SB1002の桁行の柱穴とSB1001の梁間の柱穴が対応し、SB1002の西桁行柱列とSB1004の東桁行柱列とが同一直線上にあるという位置関係がみられ、少なくともこれらについては同時存在の可能性が考えられる。井戸は、大(SE1001・1002)・小(SE1003・1004)がみられ、出土遺物からSE1001が古く、次いでSE1002、SE1003、SE1004という順である。こうした点は、北側のSE1001・SE1002が廃絶時に井戸枠の下段を残すのに対し、南側SE1003・SE1004では一切を抜き取っていたという状況と対応をみせる。屋敷地を画する溝についてみると、西側のものが小規模であるのに対し、東・南側は堅固であり平行する2条の溝からなり、それぞれの高まりは「道」が想定される。北側を画する施設については未確認であり、さらに北へ屋敷地が延びる可能性はある。個々の遺構の細かな時期区分は困難で、溝からは14世紀～15世紀中葉にかけての時期の遺物が出土し、井戸はSE1001が14世紀後半、SE1002が15世紀初頭SE1003・SE1004が15世紀前葉～中葉で、SK1005・SX1001からは15世紀中葉の遺物の出土をみる。なおこの屋敷地としたものが1つの屋敷地なのか2つの屋敷地なのか判然としない。

**屋敷地2・3
(図版106)** 調査区域の中央北寄りで検出されたもので屋敷地の一角を捉えたにすぎない。屋敷地2は北側および西側をSE1022で、南側をSD1025・SD1026で画された南北40m、東西44m



第224図 屋敷地1～3

以上の（推定）方格の屋敷地でその内に掘立柱建物が3棟以上、井戸3基がある。屋敷地3は北側および西側をS D1025で画された屋敷地で、南北20m（推定）東西14m以上をはかる。地山面の高位差からみて、西側部のS D1025はさらに南下し、南側に回っていた可能性がある。その内には柱穴様の土坑が多く検出されたが、建物と認定し得るものは少なく1棟をみるにすぎない。また井戸については未確認である。屋敷地2・3とも溝・井戸からの出土遺物は、14～15世紀前葉の年代を示す。なお屋敷3の西・南側（S D1023沿い）には「道」が想定される。

その他 調査区域の中央南寄りで検出されたS E1016の周辺には柱穴様の土坑が集中し、屋敷地の可能性がある。また同じ中央南寄りの東・南側をS D1033、西側をS D1034で画された方形の広場（東西35m、南北35m）もその内に井戸が一基みられ屋敷地の可能性がある。

i. 遺構の年代

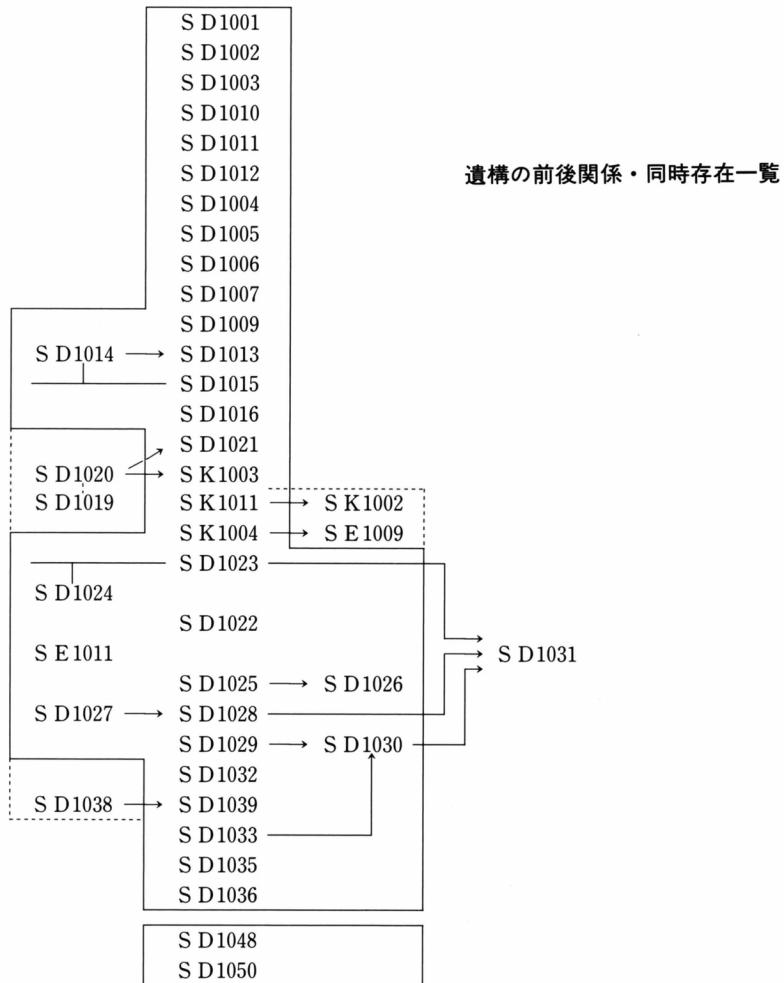
遺構の年代について、まず遺構相互の前後（切り合い）関係および遺構の配置状況から知られる同時存在について整理し、そのち出土遺物の検討を通じて得られる「年代」観を提示したい。

遺構の前後関係と同時存在 遺構相互の切り合いにより前後関係から知られるものについて前後関係を→印（前→後）で示す。次に遺構相互の切り合い関係（前後関係）が認められる同時存在した（つながっていた）と考えられるもの（——でつなぐ）、および遺構の配置状況・位置関係からみて同時存在の公算の高いもの（……でつなぐ）についても、北から順に列挙することにする。後者の場合、柱通り、柱節の揃い、溝の平走関係・位置的にみて連続する公算が大等々

を根拠にするもので確実な前者に較べ格段におちる。

以上の前後関係および同時存在を組み合せて整理したのが下表である。

遺構は部分的に切り合い関係が認められるものの、総じて同時存在と考えたとしてもおかしくない配置状況を示している。もとよりこれらすべてが同時に存在したわけではなく、先行する溝に平行する位置にあとから溝が開削された場合もあったであろうし、先行する溝にとりつける新らたに溝が設けられた場合も考えられる。また廃絶の早遅が生じたことも充分に予想される。ただここで強調しておきたいのは、こうした配置状況は遺構が設けられてからのち廃絶にいたるまでの間にその配置が大きく改変される事態が生じなかつたことを物語っているものと解される点である。想像の域を出ないが、そこには何らかの「計画性」あるいは「規制」（例えば地割の制定）がはたらいていたことが予想される。



上記の SD 1014・SD 1020・SD 1019・SD 1024・SD 1027・SD 1038は先行遺構の可能性もあるかにみられるが、これらが切り合い関係のないほかの遺構と同時存在の公算もある。